

医療医療通訳セミナー・ 医療通訳を考える全国会議

2006

2006年1月28日(土)

3F
ホールB

ぜんたいかい
全体会 1
(10:40~12:00)

コーディネーター：
MICかながわ 西村明夫 プログラムアドバイザー
リソースパーソン：
英語医療通訳協会 押味貴之 医師
MICかながわ 高橋英樹 専門調査員
元(財)自治体国際化協会 ニューヨーク事務所 所長補佐

- ① 国内の最近の取組事例(MIC かながわ、多文化共生センター・きょうと、日本英語医療通訳協会等)の報告と課題提起
- ② 課題1「医療現場の多文化対応」:米国内ワシントン州シアトルのハーバード・ビュッ病院、マサチューセッツ州ボストンの対応の事例報告
- ③ 課題2「医療通訳の質的向上」:米国内ワシントン州の医療通訳認定制度、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州の状況の事例報告
- ④ 課題3「医療通訳派遣システムの確立」:カナダ・ブリティッシュコロンビア州の医療通訳派遣システム、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州の医療通訳派遣システムの事例報告

*平等・対等な意見交換・議論を行うことをめざすため、
医師、大学等教員を「先生」と呼称しないこととします。
会議での意見・発言は、建設的、肯定的に行うものとします。

3F
ホールA

こうりゅうかい
交流会
(17:10~19:00)

ぜんたいかい
全体会 2
(16:00~17:00)

3F
ホールB

コーディネーター：
MICかながわ 西村明夫 プログラムアドバイザー

- ① 分科会報告(3分科会コーディネーター)
- ② 全体討論
- ③ 全国ネットワーク化の提案

いま、在住外国人が増えています。そして医療現場でも、ことばの壁で十分なコミュニケーションがとれず、不安な思いをしている患者の方々やもどかしい思いをしている医療従事者がいます。そうした中、国内の各地域で、行政、国際交流協会、NPO、活動実践者、医療関係者、通訳者などが連携して、少しずつではありますが、取組が進められています。

しかし、本当に質の高い多言語医療サービスが、持続可能なシステムとして地域社会に定着していくのでしょうか。本当に医療の現場でこうした取組が支持されていくのでしょうか。地域によっては一部の実践者がネットワークもなく孤軍奮闘しているのではないのでしょうか。

そうした医療通訳をめぐる諸課題を解決するため、海外と国内の医療通訳先進事例をもとに全国各地の皆さん、どうしたらいいか議論しましょう。今後の方向について一緒に考えましょう。そして全国的な顔の見えるネットワークを構築しましょう。

4F
第3会議室

だいぶんかかい
第1分科会 (13:00~15:50)
～医療分科会～ 「外国人医療における現状と課題」

コーディネーター：済生会神奈川県病院 松野勝民 メディカルソーシャルワーカー
リソースパーソン：公立甲斐病院 井田健 副院長・外科部長、滋賀県国際医療研究会代表
りんくう総合医療センター市立泉佐野病院
伊藤守 副病院長・脳神経センター長
前橋赤十字病院 福沢正士 副院長

外国人の医療問題を現場から考えると、「お金」と「ことば」がポイントになりますが、特に「ことば」の問題は、通じなければ医療の提供は難しいため、最優先課題です。

医療を受ける権利は、生きる権利そのものであり、万人平等であるはずですが、外国籍住民にとって「ことば」の壁が医療を受ける際の〔バリア=障害〕となっています。そして「ことば」の問題をクリアすることは患者のみならず、医療機関側にとっても正しい医療の提供に必要な不可欠なものであると思われまます。

現在の日本の医療現場は「外国人の患者」に不慣れであり、ましてや「+通訳」という状況や文化習慣の違いに戸惑うケースが見られます。また経営面からは、診療時間がかかることを嫌がる傾向もあります。

そうした現状を踏まえつつ、この分科会では、神奈川県医療通訳派遣システムなど具体的な取組事例を参考にしながら、現状の医療現場における外国籍患者の受入上の課題を明らかにし、医療機関側が求める「通訳像」など、できる限り実現性のある議論を展開し、課題解決の方向を探ります。

3F
ホールA

だいぶんかかい
第2分科会 (13:00~15:50)
～通訳分科会～
「目指すべき医療通訳養成制度」

コーディネーター：押味貴之 医師
リソースパーソン：
MICかながわ 松延 恵 事務局長
日本英語医療通訳協会 水野真木子 代表、千里金蘭大学助教授

医療通訳の業務は、他の医療専門職の業務と同様、患者の生命に関わる重要なものですが、現状では、パイリンガル人材が不足する中、人材養成制度の整備が十分とは言えません。そのため、専門知識や必要なスキルが不十分なまま医療通訳に従事している状況がある一方で、パイリンガルのボランティアの中には、医療通訳へのチャレンジを回避するものも多いといわれています。

そこで、第2分科会では、目指すべき日本の医療通訳養成制度について、リソースパーソンからの海外事例やMICかながわ等の国内事例をもとに、必要とされるスキル、その養成方策、認定制度の必要性などを議論し、具体的な統一見解を得ることを目標とします。

だいぶんかかい
第3分科会 (13:00~15:50)
～システム分科会～
「医療通訳の制度化に向けて」

4F
第6・7連結会議室

コーディネーター：(財)自治体国際化協会 大桑美也子 主査
リソースパーソン：(財)三重県国際交流財団 宇藤美帆 専門員
JA愛知厚生連 加茂病院 前徳比嘉ノラ 通訳

外国人や日本語を母語としない住民のため、各地の医療機関や支援団体が医療通訳事業に取り組んでいます。医療通訳を制度として定着させていくには、予算、関係団体の理解と連携、人材育成などまだまだ多くの課題を解決していかなければなりません。

そこで現在医療通訳事業に取り組んでいる団体や病院の担当者から、事業開始から現在に至るまでの経緯、課題の発生、そしてそれをどのように解決していったのか等について報告いただきながら整理していきます。

特に当分科会では、これから医療通訳事業に取り組もうとしているあるいは課題を抱えている方々や、仕組み作りに興味のある方々を対象に、国内の派遣システムや医療通訳を雇用する医療機関の事例を紹介いたします。

そして、医療通訳に具体的に取組んでいくためのイメージを膨らませながら、通訳制度について議論を深めていきます。